

小学校6年間におけるオーバーアチーバーとアンダーアチーバーの変動パターンの分析

○宮本友弘（聖徳大学）・倉元直樹（東北大学）

1. 問題と目的

学業不振児は、伝統的に知能との関連から捉えられてきた。知能水準から予測される学力を示さない者のことであり、アンダーアチーバーという（以下、UA）。逆に、知能水準から予測される以上の学力を示す者をオーバーアチーバー（以下、OA）という。

両者の比較から、学業不振の要因が検討されてきた。歴史的には、家庭環境(原岡, 1957)といった環境要因から、動機づけ(石黒, 1971; 速水, 1981)といった個人内要因に焦点が移ってきた。いずれにせよ、これまでの研究では、ある一時点での学力と知能の測定にとどまっており、UAとOAの個人内の変動については検討されてこなかった。

そこで、本研究では、ある小学校において毎年実施されている標準学力検査と知能検査の結果を利用して、1年生時と6年生時のUAとOAの様相を比較してみたい。また、6年間かけて学業不振が改善された者の規定要因について、学習コンピテンスと学習動機づけに焦点を当て探る。

2. 方法

分析対象 平成X年度～平成X+8年度の入学者うち、小学校1年生時と6年生時の学力検査、知能検査のデータが揃っている534名(男子247名、女子287名)を分析対象とした。また、このうち、平成X+6年度～X+8年度の入学者には、6年生時に質問紙調査を実施した。

学力の指標 研究協力校が毎年2月に実施してきた「教研式標準学力検査 NRT」のうち、国語と算数の全国基準による偏差値(平均 50、標準偏差 10)を利用した。

回帰成就値の算出方法とUAとOAの定義

上記の学力偏差値と、研究協力校が毎年4月に実施してきた「教研式新学年別知能検査サポート」の全国基準による知能偏差値(平均 50、標準偏差 10)から推定される学力偏差値との差を、回帰成就値(新成就値)とした。「教研式標準学力検査 NRT」の手引きに従い、新成就値が-8以下をUA、-7～+7をバランスドアチーバー(知能と学力のバランスがとれている。以下、BA)、+8以上をOAとした。

質問紙

①学習コンピテンス 児童用コンピテンス尺度(桜井, 1992)の下位尺度うち、学習コンピテンス(例「勉強はクラスのなかでできる方ですか」)を使用した。10項目4段階評定。

②学習動機づけ 竹村・小林(2008)が自己決定理論に基づいて作成した尺度を使用した。内的調整(例「勉強をすると楽しい気持ちになるから」)、同一化調整(例「勉強をすることは大切なことだから」)、取入調整(例「みんなに「頭が良い」と思われたいから」)、外的調整(例「先生にうるさく言われたくないから」)の4つの下位尺度、各4項目、4段階評定。

倫理的配慮 本研究は聖徳大学「ヒューマンスタディに関する倫理審査委員会」の承認を受けて実施した。

3. 結果と考察

(1)1年生時と6年生時のUA、BA、OAの構成比

表1は国語と算数の1年生時と6年生時におけるUA、BA、OAの割合を示したものである。全体では、いずれの教科、学年においても、BAがUA、OAよりも有意に多かった。また、1年生時ではOAがUAよりも有意に多かったが、6年生時ではUAがOAより

も有意に多かった。男女差は、算数の6年でのみみられ、女子のUAが有意に多かった。

(2) 1年時から6年時の変動パターン

表2は国語と算数の1年時から6年時のUA、BA、OAの全変動パターンの割合を示したものである。国語、算数ともに同じ傾向がみられた。1年時にUAの者は、6年時にはBAに変化する者が他の変化よりも有意に多かった。1年時にBAの者は、そのままBAである者が最も多かったが、UAに変化する者がOAに変化する者より有意に多かった。1年時にOAの者はBAに変化する者が他の変化よりも有意に多かった。

表1 各学年におけるUA・BA・OAの割合(%)

			UA	BA	OA
国語	1年	男子 (N=247)	8.5	66.8	24.7
		女子 (N=287)	5.2	66.6	28.2
		全体 (N=534)	6.7	66.7	26.6
	6年	男子 (N=247)	22.3	68.0	9.7
		女子 (N=287)	18.1	70.0	11.8
		全体 (N=534)	20.0	69.1	10.9
算数	1年	男子 (N=247)	6.5	63.2	30.4
		女子 (N=287)	9.1	64.1	26.8
		全体 (N=534)	7.9	63.7	28.5
	6年	男子 (N=247)	13.4	73.7	13.0
		女子 (N=287)	31.4	64.8	3.8
		全体 (N=534)	23.0	68.9	8.1

表2 1年時から6年時の変動パターンの割合(%)

		国語 (N=534)	算数 (N=534)
1年	6年		
UA	UA	1.9	2.4
UA	BA	4.1	5.2
UA	OA	0.7	0.2
BA	UA	13.7	15.7
BA	BA	47.9	42.9
BA	OA	5.1	5.1
OA	UA	4.5	4.9
OA	BA	17.0	20.8
OA	OA	5.1	2.8

(3) 学業不振の改善要因の検討

表2のうち、国語と算数それぞれにおいて1年

時にUAだった者が6年時にBAあるいはOAに変化した者を学業不振の改善群、一方、1年時にBAあるいはOAだった者が6年時にUAに変化した者を学業の悪化群とし、学習コンピテンス及び学習動機づけ得点の比較を行った(人数差が大きいため、メディアン検定を行った)。その結果、学習動機づけのうち「内発調整」において、算数での改善群が悪化群より高得点者が有意に多かった(図1)。その他の有意差はみられなかった。

以上から、1年時にUA、OAだった者の多くは小学校6年間を通じてBAに変化する。その際、とくに算数の学業不振からの改善には、より内発的な動機づけの育成が重要であることが示唆された。

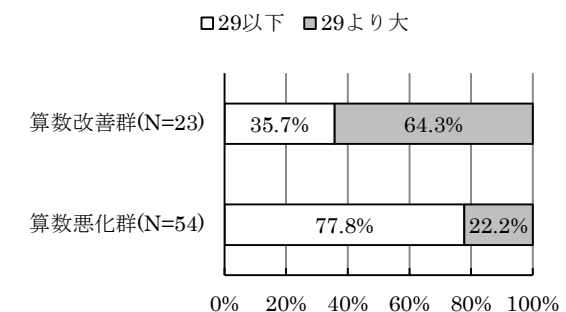


図1 算数改善群と算数悪化群における「内発調整」得点のメディアンを分割点にした人数の割合

引用文献

- 速水敏彦(1981). 学業成績の原因帰属オーバーアチーバーとアンダーアチーバーに関連して 教育心理学研究, 29, 80-83.
- 原岡一馬(1957). 学業成績に対する努力と家庭環境との関係 教育心理学研究, 4, 29-40.
- 石黒杉二(1971). 記憶における動機づけの効果: III - アンダーアチーバーとオーバーアチーバーの比較 - 教育心理学研究, 19, 98-106.
- 櫻井茂男(1992). 小学校高学年生における自己意識の検討 実験社会心理学研究, 32, 85-94.
- 竹村明子・小林稔(2008). 小学生における親子関係と学習への動機づけの相関分析 琉球大学教育学部紀要, 73, 215-224.